

ともに 歩もう 石巻だより

子どもたち
あの日、帰らぬ旅に出た
子どもたちの記憶を刻みます

佐藤愛梨さん「6歳」

「悲しい時は笑うんだよ」

夏の日。3歳の姉は、出産を終えた母を病院に見舞った。小さな妹を目にして一言「だきたい」。母は姉をベッドのせて、そのひざの上で妹をだかせた。「じゅりちゃん」。姉は呼んだ。まだ母のおなかにいた時から呼んでいた名だ。

誕生前に女の子とわかり、両親は名前の候補を並べ、どれがよいかと姉に尋ねた。「じゅりちゃんがいい」。即答だった。

それ以来、姉の愛梨さんは「じゅりちゃん」とおなかの妹に話しかけ、誕生を待ちわびていた。生まれた妹に母がかかりきりになっても、すねることはなかった。ただ、ベビーベッドの前で「愛梨も」と言ったことがある。母は「壊れないかな」と少々心配しつつ、愛梨さんを小さなベッドの上へ。「私もバブコちゃん」。赤ん坊になった気分、妹の口からおしゃぶりをぬきとると、よだれでベタベタなのを気にもせず、うれ

しそくにパクツとくわえた。

リカちゃん人形も、ウサギのぬいぐるみも姉妹で遊んだ。妹のため姉が着せ替え「これ、じゅりちゃん。これ、私」。2010年のクリスマスプレゼントは、リカちゃんの部屋 大喜びだった。

朝、妹が目覚めれば、姉はすでに幼稚園へ行った後。帰ってくれば、「愛梨い、おかえりい」と出迎える。うしろをついて歩き、まねをしたがる。「じゅりちゃん、まねしないで」と嫌がられてもやめず、ついには「じゅりちゃん、やめて」と、はたかれたことも。「愛梨っ」と姉が母に叱られた。はたかれた記憶は、妹にはない。

「大丈夫。怖くないよ」

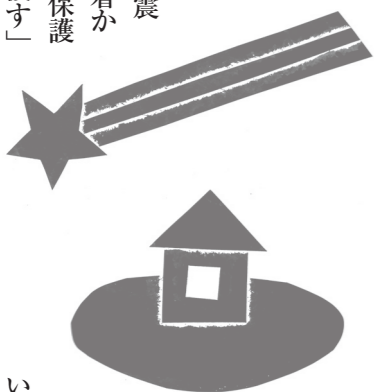
11年3月11日。愛梨さんは母に起こされた。「幼稚園行くの、行かないの」「行く」。

とあったが、園側は、園児が寒さに震えて不安な顔を見せていたため、一刻も早く保護者の元へ返してあげたいと考えた、と主張。13年9月、仙台地裁の判決は、遺族の訴えを認め、こう説いた。――最大震度6弱の揺れが約3分間も続いていたから、地震の震源地等によっては巨大な津波に襲われるかもしれないことは容易に予想される。

無事だった園児の保護者が証言してくれた。車中で子どもたちが泣く中、愛梨さんは泣かずに「大丈夫。怖くないよ」と励ましていたことを。判決後、別の保護者も教えてくれた。車中の愛梨さんが、泣いている子のために歌をうたっていたことを。震災直前、卒園式の準備中に涙ぐんだ先生へ愛梨さんはこう言ったぞうだ。「先生、悲しいときは笑うんだよ」

「お姉ちゃん」

園側は仙台高裁へ控訴した。両親たちは14年1月から再び裁判所へ通う。



震災直後、妹は「愛梨を連れて来て」と何度も訴えたが、母は「違う場所にいるから」と、変わり果てた姿の姉に最後まで会わせなかった。帰宅した小さなひつぎを妹が手でたたき「これなあに」と聞いても、母は「大事なものだ

伝えたい。過ぎ去った日々のあの笑顔。暗闇に立ちすくんだ時、この記録が足元を照らす光となるように。そしてまた明日の朝を迎えられるように。朝日新聞社員がつづる。



寝起きにぐずることはなく、この日もすぐに身支度した。バス停で、母娘は、いつものように両手をつないで、足踏みごっこをしながら待った。声を立てて笑った。幼稚園のバスが来た。母は「よろしくお願います」と娘を託し、手をふった。車中の娘はいつものように澄まし顔で座っていた。

バスは約5キロ先、高台の日和山に立つ日和幼稚園へ。当時、近所の人が撮影した映像を、のちに母は手に入れて目を凝らした。地震発生から約15分後の午後3時すぎ。バスに乗る豆粒のような人影。2人目。真っ白なコート姿。愛梨だ。乗っちゃだめよ。見るたび母は叫びたくなる。

12人の園児が乗った。7人の自宅は海側だが、愛梨さんを含む5人は内陸。5人は本来、7人とは別のバスに乗るはずだった。映像の中、バスは海へ向かう。防災無線が「ウー」と大音量でサイレンを流し、「大へから触らないでね」と繰り返すだけ。ひつぎを開ける時、母は妹を抱きあげて別室へ連れて行った。

妹は覚えている。「じゅりね、愛梨の最後のかなを見たと言ってたけど、ママは、だっこして、見せてくれなかった」葬儀の後、母は、妹の傍らに座って告げた。「愛梨はね、お星様になったんだよ」妹の目から、母が初めて見る大粒の涙がポロポロと落ちた。それ以降は「連れて来て」と言わなくなった。なぜ言わなくなったのか。6歳の時に妹は語った。「なんでうちに帰って来ないんだって言いかけた。でも、ちっちゃかったから、どう言えればいいかわかんなかった」

13年11月。母は、小学校のバザーへ妹を連れて行った。帰り際、妹は母に尋ねた。「3年生の教室はどこ」。戸惑う母に「探しに行こう」と妹は歩き出した。3年生の教室が並んだ廊下で母が立ち止まると、妹は「愛梨は何組」。困惑する母をよそに教室を見て回る。姉はいない。母が「帰ろっか」と声をかけると、「ん……」。

入学前、妹は、自分のノートに覚えてたの平仮名で書き留めている。「あいがいればたのしいのに。じゅりはたのしくない。あいがかいてきてくれたら、あいらしいのに。あいらしいことおもてるの。あいらにかいてきてほしい。ねがいはそれだけ」小学校入学後、妹は「お姉ちゃん」と口にするようになった。「私にもお姉ちゃんがいる」との訴えだと母はわかっている。

明日の風

舞台上高校生が演じる女性は、笑いながら恋人と別れた日を語る。「その日だけ、サラダに私の大好きなアボカドが入ってなくて、それであたしすっごい怒っちゃってさ。ほんとバカよね」。一瞬の間。「悔しいーっ」。彼女は絶叫した▽2013年11月の高校演劇コンクールの宮城県中央大会に出場した県立石巻高校演劇部「アボカドの降る朝に」のクライマックスだ▽観客席の私の脳裏には女川町で出会った人々が走馬灯のように浮かぶ。11年9月から取材を始めたこの町で、ほぼ10人に1人が東日本大震災の津波で命を落とした▽行方不明の母のことを語ってくれた中学生は「あの日に限って『行ってきます』を言わなかったんです」。最後まで笑顔を崩さなかった▽「アボカド」の脚本を書き下ろした3年生の佐藤そのみさんの経験にも重なる。金曜日のあの朝「おはよう」と言う妹のみずほさんに、いつものように朝は不機嫌な姉は何も返さなかった▽妹は石

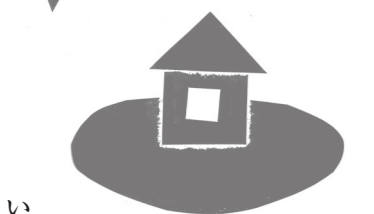
巻市の大川小学校6年生だった。地震後、姉は自宅で待った。自分はカップ麺で我慢。妹にあんパンを大事にとっておいだ▽だが、帰って来ない。日曜日朝、母の車で学校へ。あんパンも持った。途中で通行止めだ。誰かの声。「みずほちゃん、あがったよ」。道路にしがみついて泣いた▽妹を夢に見る。高校の保健室で休んでいた時も。起きた直後は現実を忘れ、妹に早く会いたいと思った▽「弟妹は」と聞かれると「2コ下がいるよ」と答える。それ以上は話さない。「つらいのは自分だけではないのに、自分のことを話すのは申し訳なくて」▽「アボカド」は青春群像劇だ。震災には触れていないが、主題の「後悔しない生き方」にあの日の思いをこめている。劇中、恋人を亡くした女性のために1人、また1人と集う。雲間から、光が差し込むような終幕だった▽この欄は被災地の見聞録です。タイトルの「明日の風」にこんな願いをこめました。明日は新しい風が吹くから、だいじようぶ。

津波警報、高台へ避難して下さい」と呼びかけていた。バスは園を出発して約40分後、引き返す際に津波に襲われ、炎に包まれて、内陸に住む5人が犠牲になった。海側に住む7人は、親たちに引き取られて無事だった。バスの運転手は津波で車外に押し出され、九死に一生を得て幼稚園へ戻った。

夕方5時頃。父が園へ迎えに行った。「津波にのみこまれたかもしれません」としか聞かされず、周辺の避難所を捜した。夕方6時半頃に園へ戻り、「バスと連絡はとれましたか」と尋ねたが、園長は首を横にふるだけ。連絡がとれていないのだと思いついた父は一晩中、避難所を捜し歩いた。

あの時、はつきり教えてくれたら。すぐ近くにいたのに。助けられたのに。その無念に、父は今も胸が張り裂けそうになる。3日後、両親は愛梨さんを見つけた。園から約200メートル先。バスの中で抱き合うようにしていた子どもたち。腕に残っていたコートの白いファアを確認した。

なぜ海へ向かわせたのか。標高約23メートルの園にとどまっていれば助かった命だったのに。それを問うため、愛梨さんたち園児4人の遺族は11年8月、園側へ損害賠償を求める訴訟を仙台地裁に提起した。



園のマニュアルには大地震の時に「声掛けして、落ち着かせて園児を見守る。園児は保護者のお迎えを待つて引き渡す」

ともに 歩もう 石巻だより

子どもたち
あの日、帰らぬ旅に出た
子どもたちの記憶を刻みます

佐々木明日香ちゃん「6歳」 三輪車で姉のお見送り

「おっとう」「おっかあ」。父純さんと母めぐみさんを呼ぶその声は今も2人の耳に残っている。祖母は「ばあちゃん」。4歳上の姉は「お姉たん」だったり「お姉ちゃん」だったり。2人姉妹の妹だった。

姉の名前は母が決めたので、妹の名前は父が決めることに。父が候補を並べ、最後に「あすか」を選んだのは、姉だった。

姉のまねをしたがる妹だった。姉が勉強する傍らで、自分も紙に向かう。祖母が教え、平仮名は全部書けるようになった。あの頃の住まいは、道路をはさんだ向かいに小学校があった。

朝、小学生の姉がピンク色のランドセルを背負って靴を履く。時に明日香ちゃんも急ぐ。三輪車にまたがり、「お姉ちゃんのこと送ってくるから」。勢いよくペダルをこぎ出す。玄関前から道路までのおよそ20秒の



明日香ちゃんを出迎えた。朝は、母の車で約5キロ先の日和幼稚園へ。帰りは園のバスで送られてくる。「今日ね」と真顔で話し始めた。いぶかしむ口調。「お友だちのおうちをぐるつとまわった。内陸の家とは反対側の海側をバスはまわった。バスは内陸に住む園児だけが乗るのに、なぜ。一瞬、思ったが、「卒園前のサプライズかな」とがめなかった。

この記憶が母の心に刺さっている。姉に書き残しておきたい。忘れないでほしい。親になった時、繰り返し返さぬよう。自分と同じ思いを味あわせたくないから。その夜、いつものように親子4人の布団を並べて休んだ。「おやすみ」と父が声をかけると、「おやすみ」。布団から声が返ってきた。父は朝6時の出勤に備え、すぐ寝入った。あの晩、もっと夜更かしして、もっと話せばよかった。父の心残りとなっている。11日未明。母は隣の気配ですぐにめざめた。布団の中で必死に足を動かし、泣い

親子4人、並べた布団で

あの時にもっと……。両親の思いは尽きない。11年3月10日午後。母は近所の駐車場で

ている。こわい夢でも見たのか。「大丈夫、大丈夫、寝なさい」。ポンポンとやさしく布団の上からたたいた。

その日は、赤いチェックのシャツに、星模様がついた青いトレーナー、紺色のズボンを着せた。いつものように車で送ったが、その日に限り、「いつてらっしゃい」と見送る母を確認するように何度も何度もふりかえり、園庭を歩いていく。そのつど「大丈夫ね」と声をかけた。「うん」「うん」とうなずいては小さく手をふっていた。

地震の時。母は家にいた。防災行政無線を聞くより先、激しい揺れに確信した。津波が、絶対、来る。

明日香ちゃんを出産した04年の暮れにテレビで見た、スマトラ沖地震の光景が、脳裏によみがえる。小学4年生の姉を連れて駐車場へ。園のバスを待った。前日同様、海側をまわるなら、地震前にバスは出ただろう。行き違いになりたくない。「お母さん、警報が鳴ってる」と青ざめた姉。「わかる、わかる」。母も動転していた。祖母も来た。迎えに行こうにも、道路が冠水し、行けない。

父も帰宅した。明日香ちゃんは戻っていると思い込んで帰ってきた父は、まだだと知った時点から記憶が定かでない。さらに内陸へ車で避難し、車中で夜を明かす。海側が明るい。時折、夜空にのぼる火柱を見つめながら、母は、無事を念じた。

地震の時。明日香ちゃんは園にいた。園は、高台の日和山の標高約23メートルの所に立

伝えない。過ぎ去った日々のあの笑顔。暗闇に立ちすくんだ時、この記録が足元を照らす光となるように。そしてまた明日の朝を迎えられるように。朝日新聞社員がつづる。

かった」

13年9月、一番の仙台地裁判決は両親たちの訴えを認め、こう指摘した。

――眼下に海が間近に見える高台の幼稚園で約3分間続いた最大震度6弱の巨大地震を体感したのだから、バスを海沿いの低地帯へ出せば、途中で津波により被災する危険性があることを考慮するべきだった。園側は一番判決の取り消しを求め、今なお控訴審が続く。

大事な命が誕生した日

あの後。一家は、小学校から離れた所へ引っ越した。家まで届く小学生の声を耳にするのが、どうしようもなく切なかった。今もランドセルを背負った新入生を見ると、「つらい……を通り越していますね」と父は目を赤くする。「そういう幼稚園へ入ってしまったという罪悪感も出てきて」

時々、父は夢で明日香ちゃんに会う。何事もなかったように話している。目がさめて現実に戻され、落ち込む。「めんこかった」と父は目を細める。甘い上手な子だった。その性格は誰に似たのでしょうか。と尋ねれば、「たぶん俺ですね。俺も2人兄弟の弟だから」。

母にとつて、1年の始まりは1月1日ではなく、3月11日だ。「また明日香がいない1年が始まった」と思う。父にとつて1年は、明日香ちゃんが生まれた10月20日、大事な命が誕生した記念日から、始まる。

明日の風

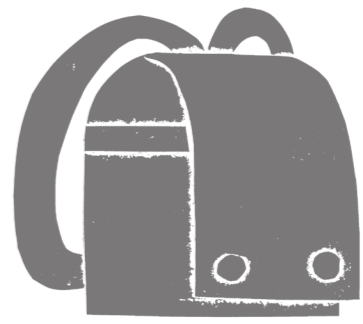
1通の封書が届いた。「最高の夏休みを！」と表に記してある。「小学生向け通信教育」の案内だ。今年の夏の初めのこと。中身は捨てたんですが、封筒は捨てられなくて……。母親はそう話しながら、きれいに畳んであった封筒を広げ、私に見せてくれた▼宛名は「佐藤愛梨様」。長女の名前。これは捨てられませんでしたね……。長女は石巻市の小学校入学を控えた3年前の3月11日、幼稚園のバスに乗せられて海辺へ。津波の犠牲になった▼さらに今年8月25日。今度は、電話がかかってきた。女性の声で「4年生のお子さんがいらつしやいますね」▼そう、小学4年生になるはずだった。春から何度も何度も思っていることだ。母親が返答に詰まっていると、女性は「保護者の方はいらつしやいますか」▼「はい、私が4年生の親ですって、私も言いたいです」と叫びたい気持ちをこらえ、母親は聞き返した。「どうしてこちらの電話番号がわかったのですか」▼「電話帳で」と女性は一言返して、学力向上策が必要だと説き始めた。「うちは結構です」と断ったが、なおも「4年生のうち土台作りをしなれば」。結構です」と繰り返すと、女性は「いいんですね」。『いいです』と電話を切った。見ず知らずの人には何も話したくなかった

▼受話器を置くと、心の底に沈めていた無念が、怒りが、悲しみが、次々にわきあがってきた。その翌日もまた翌々日も▼電話帳には番号は載せていない。だが、思い当たる節があった。教育産業のベネッセホールディングスの顧客情報流出事件だ。長女は0歳の時から使っていた。震災の年に事情を打ち明け、教材の購入はやめた▼10月10日。母親はベネッセに電話で問い合わせた。数分待ち、長女の情報も今回の漏えい対象だと知らされた。その晩、私に語ってくれた▼「もう今はいいからいいのだと思ってるほしくない。私は今も愛梨のことを守りたいんです」。石巻から教わる。耳に届かぬ声に、目に映らぬ日常に、思いをはせたい。

ともに 歩もう 石巻だより

子どもたち
あの日、帰らぬ旅に出た
子どもたちの記憶を刻みます

西城春音ちゃん「6歳」 姉と一緒に遊んで走って



母のおなかにいた時から元氣よくポンポンと蹴ってばかり。男の子だと母の江津子さんは信じ、父の靖之さんの「靖」の字と「太郎」を合わせて「せい太郎」と名付けるつもりだった。

満面の笑み。姉と一緒だ。インフルエンザで休んだ以外に欠席したことはない。園から帰れば、姉と遊んだ。小学1年生になった姉と公園へ行つた時のこと。ブランコ脇の柵に手をかけ、クルンと一回り。両足をそろえ、きれいにさかあがりを決めた。姉も母も目を丸くした。走るのも好き。1年生の姉が始めた陸上のクラブに、自分も「学校に行ったら入れっから」と楽しみにしていた。陸上が不得手な姉は「春が入ったら、やめるから」。

ね。でも、行けなかったね。春の入学式にみんなで行ってきたからね。春入学おめでとう。これから、みんなのことを空から見守ってね。

4月、生まれたのは女の子。姉の楓音ちゃんとそろえて「はるね」と名付けた。春音ちゃんが母と共に退院すると、1歳半の姉が待っていた。母が「春ちゃんを見てね」と頼めば、歩くことはできても、おむつはまだ外せない姉が、じつと赤ん坊を見守ってくれた。赤ん坊が泣き出せば、小さな姉が哺乳瓶を抱えてきてくれた。父母と小さな姉と同居の祖父母のみんで育てた赤ん坊だった。

2011年7月。葬儀を行った。3年生の姉が手紙を読み上げた。——春、お元氣ですか。春がいたころはいっぱい、おしゃべりをしていたから、今はおうちの中が少し静かになって、さみしいです。天国でも、いっぱい、おしゃべりしてね。本当は一緒に学校に行くんだって

淡いピンクのランドセル

共働きの両親は、3歳になった姉のため夕方の預かり保育をしている幼稚園を選んだ。当初は泣きながらの登園だった。一方、3歳になった妹は、登園初日から

6年生になって、こんなこともあった。いところから「ピアノがなくした」と相談を受け、自分のものを譲り、姉自身は妹のピアノを使うことに。「名前を書いたら」と言う母に「春音って書いて持っていく」。母は驚き、「間違えられたら困るから、自分の名前も書かないとダメだよ」。

父は「春も学校さ連れてって」と姉に頼んでみた。濃いピンクのランドセルを使う姉に、淡いピンクの妹のも使ってほしいと願った。「いやだ」と断れながらも、父は時折「連れてって」。5年生になった姉は、父が頼むより先に、淡いピンクのランドセルを背負った。「それどうしたの」と問う級友に、姉は答えた。「春ちゃんのなんだ」

明日の風
晩秋の山道をぬけ 牡鹿半島の東、石巻市前網浜の仮設住宅に行政委員の大友直さん(73)を訪ねた。日焼けした顔をほころばせながら、今月に入っても水揚げが続いたことを教えてくれた▼あの日まで23世帯82人が暮らした浜ではホヤ養殖が盛んだった。大半を韓国へ輸出し、浜の年商は2億円にも上った。だが震災で一変。被災を免れたのは5世帯。浜の仮住まいに13世帯が残った。大友さんたち8人は「前網漁業生産組合」をつくり、養殖を再開。種が育つまで定置網漁でしのぐ▼そして震災後初の水揚げを迎えるはずの今春。誰も買いに来ない。夏に入ると、大友さんは私に「韓国で売ってきよ」と嘆いた。福島第一原発の汚染水を危ぶんだ韓国の輸入禁止が直撃した▼同じ頃、伊豆のイシダイも拒まれた。伊豆は輸入禁止海域ではない。風評被害だ。三陸でも定置網漁を手がける泉澤水産の泉澤宏事務(52)が語った。韓国の高級魚が国内で同様に売れるかと言えば

など思っ。冬になると寒いかなと思っ」と母。毎年春、母は近所の文具店で小学校の名札を買う。「三年一組」「四年一組」……。父が記し、仏壇に供える。

校庭で園児3人が保護者に引き取られた。戻る途中の坂でバスは渋滞に巻き込まれた。園から駆け下りてきた保護者が、園児2人を引き取った。「津波だ」という声が坂の上から聞こえ、保護者は園児2人の手を引き、無我夢中で坂を駆け上がった。

に園側に損害賠償請求訴訟を起こした。父は「みんな、この震災を教訓にしますって言うけど、何が実際あったか分からなくて、何を教訓にすんのやって思う」と語る。震災後、防潮堤の建設や高台の宅地造成が進むが、「それで尊い命を守れるとは思えない。日和幼稚園のように高台から下へおりてしまっ人たちもいるんですよ」。

あの日。春音ちゃんは、高台の日和山にある日和幼稚園にいた。地震後に近所の人々が撮影した映像がある。午後3時2分頃、園のバスに乗り込む一瞬の人影を母は見逃さない。紫色のジャンパーを羽織った1人目こそ、春音ちゃんだ。バスは、春音ちゃんたち園児12人を乗せ、標高約23メートルの園から海側の低地へ下りて行つた。

午後3時45分頃、津波が到達。内陸に住む春音ちゃんたち5人が車中にいた。父は園をめざしたが、冠水が阻んだ。翌朝、肩まで水につかりながらも到着。園でバスの場所を聞き、向かう。園から付き添う人はいなかった。車はまだくすぶり、あまりの熱気に手がつけられない。

「お月さんになったの?」
春音ちゃんには2人の弟がいる。あの日は2歳半だった靖汰君は、アニメ「アルプスの少女ハイジ」のハイジと子ヤギの踊りが大好き。一緒に踊って、とせがむ弟の手をとり、春音ちゃんは、弟があきるまで一緒に踊ってあげた。震災後、弟は母と園へ行くたび「春ちゃんと一緒に帰ろう」と屈託ない。しばらくして母が「春ちゃんはお空の上にいるんだよ」と教えると、「お月さんになったの?」と空をあいだ。

防災行政無線が大音量で「天津波警報」を告げ、「沿岸、河口付近から離れてください。至急、高台へ避難してください」と呼びかけていた。

2日後、家族と出直した。バスの中にゴルフクラブがある。これは違う。数メートル離れた所に園のバスを見つけた。園からは約200メートル先。春音ちゃんを捜す。園からその捜索に加わる人はいなかった。前歯が生え替わろうとしていた春音ちゃんの特徴を、父は確認した。

守れる命を守らなかつた
事実に、園側は真正面から向き合ってほしい。何をすればよかったのか、何をしなければよかったのか、あの日の刻一刻の行動をすべて検証してほしい——。その一心で、両親は11年8月、園児3人の遺族と共に

人の保護者から「もう避難して誰もいないので門脇小学校へ向かったほうがいい」と言われたが、バスはさらに園児の自宅をめぐる。2軒は不在。3軒目の玄関には門脇小へ行っているという置き手紙があり、バスも向かう。門脇小は全校児童を校舎脇の階段から標高約50メートルの公園へ避難させた後だ。その階段を、幼稚園の教諭2人が下りてきた。校庭のバス

守れる命を守らなかつた
事実に、園側は真正面から向き合ってほしい。何をすればよかったのか、何をしなければよかったのか、あの日の刻一刻の行動をすべて検証してほしい——。その一心で、両親は11年8月、園児3人の遺族と共に

の運転手へ、園へ戻るようにと園長の指示を伝え、2人は階段を上っていった。



11年8月、園児3人の遺族と共に

草も、春音ちゃんによく似ている。

「これだけ行き来がある国内でも売れる魚は地域差がある。味覚は保守的なもの」▼盛夏。ようやく前網組合の水揚げも始まった。九州への販路開拓に力を注ぐ石巻市の販売業者、ヤマナカの高田慎司社長(46)も買いに来た。「40代の若さだから頼もしい」と組合長の鈴木信男さん(63)は目を細める▼組合にも若さが脈打つ。最年少組合員の渡邊守晃さん(33)。組合仲間「もりあきは、すごいよ。力もあって魚に詳しくて」「釣りキチ三平」と同じ。俺たちが支えてもらっているんだ」▼浜に育つた中学生の時に父が他界。宮城真水産高校に進むと、父に代わってアワビ漁やウニ漁へ出た。ホヤの水揚げも手伝った。卒業後、地元の水産加工会社に勤めた。しかし、震災で全壊した浜の姿に「誰もいなくなるんでねえか」と不安を強めて退社。漁に加わった▼晩夏の朝。浜辺でむいたばかりのへソホヤを私に手渡ししてくれた。歯ごたえは厚い果肉のよう。潮の香りとともに甘みが口の中に広がった。

ともに 石巻だより

子どもたち
あの日、帰らぬ旅に出た
子どもたちの記憶を刻みます

愛梨さん 明日香さん 春音さん 新たな道のりを歩いていく

冬枯れの地に竹むと、
坂道の途中に、今も小
さな花東が供えられてい
るのがわかります。

かつて住宅街だった石巻市門脇町。
ここに立つたびに、両親たちの気持ち
に思いを馳せ、胸が締め付けられるよう
になるのです。あの日、あと10メートル、
送迎バスが坂道を上がっていったら、津波
を受けることはなかったのに。いや、こ



こに至るまでに命
を救う機会はいく
つもあったのに、と。
佐藤愛梨さん、
佐々木明日香さん、
西城春音さんら計
4人の子どもの両親が、日和幼稚園の運営法人などを訴えた訴訟は2014年12月3日、仙台高等裁判所で終結しました。判決ではなく、

「和解」でした。
この日、裁判所の一室で裁判長が読み上げた「和解調書」には、両親たちの苦闘が凝縮されています。後段に前文と和解条項(全12項)の一部を引用しました。ここにたどり着くのに、3年9カ月がかかった――。これを読んだときそう思いました。

少々難解で厳しい言葉遣いですが、大切な点は、両親らの訴えを認めた一審・仙台地方裁判所の判決も踏まえ、幼稚園側に「法的責任」があると認定したこと、そして、家族の悲しみに心を寄せ、同じことを繰り返さないための防災対策が不可欠であると述べたことです。
近年、裁判所は民事訴訟において、必ずしも判決ではなく、双方が協議したうえでの和解を勧める傾向にあります。しかし、このように法的責任にも踏み込み、後世への教訓をも説くことは、異例のこ

伝えたい。過ぎ去った日々あの笑顔を。
暗闇に立ちすくんだ時、この記録が足元を照らす光となるように。
そしてまた明日の朝を迎えられるように。
朝日新聞社員がつづる。



とでしよう。和解の内容を社会に公にする
ことも、両親たちが求めたことの一
つでした。

春音さんの父、靖之さんは「妥協した
のではないし、許したわけでもない」。
愛梨さんの母、美香さんは考えました。
「これを活かして、国や県にも命を守る
ための対策を求めることができる」
明日香さんの母、めぐみさんは「判決
で終わり、にされるよりも、これからも
幼稚園側と話し合いを続けて、あの時の
ことを少しでも聞くことができれば」と
語ってくれました。

「和解」に込めた決意

和解を受け入れるか、拒絶して判決を
求めるか。裁判所の勧めを受けたとき、
原告4家族の意見は二つに割れました。
二審・高裁の進み方を見る限り、一審
と同じように勝訴は得られるだろう。そ

れに幼稚園側の誠意は今も感
じられない。
でも、もし最高裁判所まで
いったらどれだけの年月がかか
るか。そこでどんな判断がなさ
れるか、だれにも分らない。
みなに共通していたのは「和
解」という法律用語への抵抗感でした。
「仲直り」をするわけではありません。幼
稚園側からはいまもって、ちゃんとした
形での謝罪を受けてない、との思いもあ
ります。

和解を決意するに至った理由はいくつ
かありますが、一つは、2013年9月
に出された一審判決を今後活かすこと
ができるということでした。

震災の日、大地震のあと、高台の日和
山中腹にある日和幼稚園から、12人の園
児を乗せた送迎バスが発車します。湾に
のぞむ低地の住宅街を回り、7人を降ろ
した後、園への坂道を登るところで津波
に襲われ、園よりも内陸側に住んでいた
園児5人が犠牲になりました。

高台の園内にとどまってさえいれば、
失われることのない命でした。
一審判決は、子どもの命を預かるも、

「新しいスタートラインです」。愛梨さ
んの母、美香さんはそう語りました。

子どもたちとともに

子どもたちは今もそれぞれの家族の一
人であることに変わりはありません。家
族の方々が苦衷を胸に、石巻から仙台の
裁判所に向かったとき、水に浸かった低
地で送迎バスの走行ルートをとどったと
き、すぐ近くにいてくれたのだと思いま

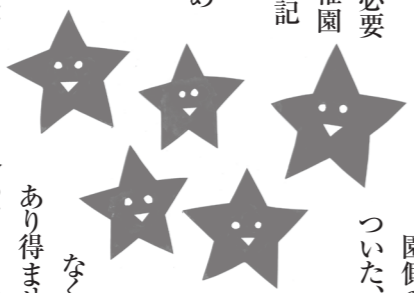
す。両親たちが苦慮の末に選んだ新たな
道のりを歩いていくのも温かく見守って
いることでしょう。
同じ思いを多くの人たちと分かち合う
ことができたならば、この社会の何かが
変わるかも知れない。裁判は終わしまし
たが、命を守る取り組みに終わりはない
ません。両親たちはもちろん、私たちみ
んなが歩むべき道はこの先も長く続いて
いるのです。

「和解調書」から

当裁判所は、原審及び当審における
これまでの審理により、本件で証拠から
認定される具体的事実関係の下では、
控訴人(注・幼稚園側)らが、被災園
児らの死亡について、原判決で認められ
た内容の法的責任を負うことは免れ難
いと考えるとともに、本件により、被災
園児らの尊い命が失われ、被災園児ら
の両親である被控訴人ら及びその他の
家族に筆舌に尽くし難い深い悲しみを
与えたことに思いをいたし、この重大な
結果を風化させてはならず、今後、この
ような悲劇が二度と繰り返されること
のないよう、本件訴訟の終了後も、被
災園児らの犠牲が教訓として長く記憶
にとどめられ、後世の防災対策に活か
されるべきであると考えているものである。
当裁判所は、このよき考えのもとに、
控訴人(幼稚園側)らに対しては、上
記の点を深く自覚、認識し、これを明
確に表明することが望まれることから、
被控訴人(両親)らに対しては、上記

の点が裁判上の和解により明らかにさ
れることよって、被災園児らの犠牲が
後世の防災対策に活かされるようにす
るため、双方に対し、本件法的紛争に
ついて、和解を勧告した。
当事者双方は、裁判所の上記勧告を
受け止め、下記のとおり、和解する。
1 控訴人(幼稚園側)らは、原判
決で認められた控訴人らの法的責任を
認めるとともに、被災園児らと被控訴
人(両親)らを含む被災園児らの家族
に対し、心から謝罪する。
2 控訴人(幼稚園側)らは、幼
子どもらを預かる幼稚園等の教育機関
及び保育所等の施設において、自然災
害が発生した際に子どもらの生命、安
全を守るためには、防災マニュアルの充
実及びその周知徹底、避難訓練の実施
並びに職員の防災意識の向上等、日頃
からの防災体制の構築が極めて重要で
あること、本件幼稚園において、津波に
対する防災体制が十分に構築されてい
なかったことを認める。 以下、略

の義務として、災害の時の「情報取
集」を挙げ、防災無線やラジオの大津波
警報に耳をすますこともせず、危険な海
沿いに子どもたちの乗るバスを走らせた
園側の責任を厳しく問うて損害賠償を
命じました。
その判断に沿った和解であれば、判例
として司法界で受け継がれます。
のちの世の命を救う手立てにつながる
かも知れない――。両親たちはそう考
えたのです。
和解条項には一審判決では触れられな
かった文言も加えられました。
第二項で、子どもの施設に必要
な防災対策に触れ、日和幼稚園
ではそれが不十分だったことを記
しています。
至極当たり前のようにも読め
ますが、両親たちがずっと言い
続けてきたことでした。ずっと。
んな備えを反省しなければ、
何も始まりません。
この和解を今後どう活かして
いくか。例えば第一項には「心から謝罪
する」とあります。どうすれば「心か
ら」と言えるのか。
震災後の説明会で幼稚園の人々は何度
となく頭は下げました。でも、両親たち
は、ていねいな説明はまだに得られて
いないと考えています。
すぐ近くの防災無線は本当に聞こえな
かったのか、内陸に住む子どもたちを、
なぜ、行く必要のない海側へのバスに乗



「和解」でした。
この日、裁判所の一室で裁判長が読み上げた「和解調書」には、両親たちの苦闘が凝縮されています。後段に前文と和解条項(全12項)の一部を引用しました。ここにたどり着くのに、3年9カ月がかかった――。これを読んだときそう思いました。
少々難解で厳しい言葉遣いですが、大切な点は、両親らの訴えを認めた一審・仙台地方裁判所の判決も踏まえ、幼稚園側に「法的責任」があると認定したこと、そして、家族の悲しみに心を寄せ、同じことを繰り返さないための防災対策が不可欠であると述べたことです。
近年、裁判所は民事訴訟において、必ずしも判決ではなく、双方が協議したうえでの和解を勧める傾向にあります。しかし、このように法的責任にも踏み込み、後世への教訓をも説くことは、異例のこ
せたのか、しかも保護者に断りもなく
……。
真実が知りたいというのが両親たちの
最大の願いでした。バスの中で子ども
たちはどんな表情で、どんなことを話し
ていたのか、ということも。
坂道で被災する前、バスはいったん門
脇小学校に寄りますが、そこで幼稚園の
先生が運転手に園に戻るよう伝えていま
す。でも、その先生は子どもたちの様子
はよく見ていなかった、と知人を介して
伝えられました。
園側の人々のいくつもの言葉に傷
ついた、という思いは消えません。
日和幼稚園でのことは、
命が失われた際、そのこと
に関わる人々が命とどのよ
うに向き合い、どう振る舞
うべきなのか、という問題も
提起しました。真摯な言葉
なくして、「心からの謝罪」など
あり得ません。子どもたちの命に向き
合ってもらい、だれもが受け入れること
のできる謝罪をもらうには、これか
ら幼稚園の人々と対話を続けなくては
ならないのです。
こうしたことは、もちろん日和幼稚園
だけの問題ではなく、私たちの社会が受
け止めるべき試練でもあります。子ども
の命を守るために大人は何をすべきか。
「模範解答」は和解文にも書かれてはお
らず、私たち自身が考えていかなければ
なりません。